

### 町工場の世界：小関智弘の町工場巡礼記の研究(3)

萩原, 進 / HAGIWARA, Susumu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

70

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

215

(終了ページ / End Page)

230

(発行年 / Year)

2003-03-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003162>

## 町工場の世界：小関智弘の町工場巡礼記の研究(3)

萩原進

## 目次

はじめに

## 第一章 労働倫理学の必要性

第一節 労働経済学における労働観の一面性

第二節 仕事と家族：浅田次郎作『鉄道員（ぼっぼや）』のメッセージ  
(第69巻 第4号)

第三節 ルター神学における〈職業〉と〈救済〉

第一項 人はパンのみに生きるにあらず

第二項 ルターのペルーフ論

第三項 ルター神学と労働研究  
(第70巻 第1・2号)

## 第二章 小関智弘の町工場巡礼記の研究——その(1)

第一節 町工場に働く人々

第一項 町工場に注目する理由  
(以上 本号)

第二項 粋な旋盤工：小関智弘の横顔

第三項 教育環境としての大森蒲田

第二節 機械工のキャリア

## 第三章 小関智弘の町工場巡礼記の研究——その(2)

第一節 旋盤工の仕事

第二節 ME革命と旋盤工

第三節 小関智弘の熟練論

むすび

## 第二章 小関智弘の町工場巡礼記の研究 ― その(1)

### 第一節 町工場に働く人々

#### 第一項 町工場に注目する理由

〔A〕 楽しい仕事の条件とは何か

仕事（あるいは労働）は、経済学の世界においては、所得を稼ぎ出すために人間がやむを得ず行わざるをえない経済的な行為、すなわち、辛いけれども辛抱して行わなければならない Toil・アンド・トラブルであるかのように見なされてきました。仕事は、人間が生活をしていくためにどうしても行わざるをえない必要悪の如きものに過ぎないのであって、それ自身に積極的な意味を有するものではまったくない、と言ったようなあまりにも一面的な経済学的労働観を徹底的に再検討することが、この論文の中心的な課題であるといえます。ところで、この種のいささか哲学的なテーマに接近するには、いく通りかのアプローチ（＝方法）が有りうるかと思われませんが、この論文においてはまず始めに、仕事あるいは労働に関して以下に述べるような理論仮説を設定しておき、理論仮説の有効性を小関智弘の町工場巡礼記によって検証しながら、人間の人格形成や生の充足感が仕事やキャリアとどのようにかかわっているのかという問題について、順次議論を進めていく事にしたいと思います。

労働研究の分野において、働き手と仕事とのかかわり、あるいは働き手の仕事に対する満足（＝job satisfaction）の有無・大小などの諸問題に対する関心が高くなったのは、我が国においては比較的最近の事に属するといって良いかと思われます。1960年代の半ば頃から我が国の内外において、初期マルクスの労働疎外論や工場労働の非人間性に対する関心が高くなり始め、労働の人間化に関する実践的な研究が活発に行われるようになりました。自動車産業において典型的に見られた、ベルト・コンベヤーを

使った移動式組立ラインにおける組立工の仕事の非人間性については、早くも1930年代の半ばに、悲惨な非人間的な工場労働の代表例と見なされて注目を集め、様々な議論を呼んできました。チャップリンの映画『モダン・タイムズ』（1936年）は、オートメーションと耐久消費財の大量生産を背景にした空前の経済的繁栄という、アメリカ産業文明が生み出した輝かしい成果の影に、労働の非人間化と大量失業という深刻な社会問題が存在することを鋭く指摘していました。しかしこの映画に描かれた〈労働の非人間化〉の問題は、戦前は労働運動の世界のみならずアカデミズムの世界においても、あまり問題にされることはありませんでした。そもそも、“フォード式生産システム”あるいは“デトロイト・オートメーション”などに具現された新技術は、未だアメリカにしか存在しない極めて新奇な技術であったために、アメリカ以外の国々においては、夢の様な未来技術として受け止められていたのであって、アメリカ式の生活様式は羨望的であったと言っても過言ではありませんでした。この新技術は、1930年代に入ってようやくアメリカ以外の国々にも移転され始めました。アメリカ国内にあっては、失業問題の方がはるかに深刻な社会問題であったこともあって、労働の非人間化の問題はほとんど注目されることがありませんでした。

大量生産のもとでの労働の非人間化が、社会問題として世間の耳目を集めるようになるのは、ようやく戦後を迎えてからだと言っても良いでしょう。

第二次大戦後にアメリカが生んだ大量生産システムは、世界中の工業国に移転されていき、安定した高い成長経済を先進工業諸国にもたらす一要因の役割を果たしました。戦前に資本主義経済の難病とみなされてきた大量失業の問題も、ケインズ革命と技術革新によって大方解決に向かうことになりました。しかし戦後経済のめざましい成功と同時に、これまで失業問題の影に隠されて無視されてきた労働の非人間化の問題や環境問題、あるいは戦後に新たに発生したクリーピング・インフレーションの問題など

が、徐々にクローズ・アップされるようになりました。労働疎外論が展開されている初期マルクスの『経済学・哲学草稿』が、1960年代に入って公開されて一般に入手し易くなりましたが、それに伴って労働疎外論の研究が一挙に開花することになったのです。

筆者が学部学生であった1960年代の前半に、労働疎外論のブームが始まりましたので、初期マルクスの疎外論が当時の学生たちに及ぼしたインパクトの大きさについては、今も鮮明に筆者の記憶に残されています。F・パッペンハイムの『近代人の疎外』の邦訳書が岩波新書の中に加えられ、続いてマルクスの『経済学・哲学草稿』の邦訳が、初めて青木文庫（三浦和男訳、1962年）に収録され、続いて岩波文庫（城塚登・田中吉六訳、1964年）にも入れられることになりました。1960年代に社会科学の勉強を始めた学生に対して、労働疎外論が及ぼした影響は、とてつもなく大きく深いものであったといつてよいでしょう。例えば、当時進歩主義者を気取っていた学生たちの間で、〈疎外革命論〉（＝社会主義革命によって労働疎外のない社会を創造するという革命理論）という奇妙な理論が流行していました。この理論は、墮落したスターリニズムから社会主義を解き放つ可能性を秘めた画期的な理論として、ラディカルな学生たちに熱狂的に支持され、学生運動の指導理論の地位にまで祭り上げられる栄光に浴したのであります。今になって考えてみますと、おまじないやカルトの類に過ぎないと断定してもよい空疎な疎外革命論に、何故に左翼学生たちがおしなべて夢中になり熱狂したのか、本当に不思議な感じが致します。恥かしいことに筆者も、この奇妙な理論を振り回して得意になっていた学生の一人であったわけであります。

1960年代から1970年代にかけて、疎外論関係の文献が洪水のように溢れていたにもかかわらず、理論研究あるいは実証研究のいずれの面においても、労働疎外に関する研究は残念ながら、水準の高いものはまことに少なかったと言わざるをえません。例外はアメリカでした。労働疎外論に関する優れた研究は、やはり大量生産システムと能率管理論（＝テイラーリズ

ム)の母国であるアメリカの研究者たちの手によってなされたのでした。前述したF・パッペンハイムの『近代人の疎外』が出版された1960年頃から、アメリカの社会学界は労働疎外論に強い関心を寄せていました。E・チノイ、ウォーカー&ゲスト、E・ロスチャイルドなどによって、大量生産工場における疎外された労働の実態に関する調査研究が続々と遂行され、あいついで発表されるに至りました。なかでもロバート・ブラウナーの『疎外と自由——工場労働者と産業』(1964年)〔邦訳：佐藤慶幸監訳『労働における疎外と自由』(昭和46年)〕は、労働疎外論に関する理論的実証的研究において、先駆的な役割を果たした重要文献の一つであったと言えます。

ブラウナーは『疎外と自由』(特に第二章)において、労働の疎外をもたらす様々な要因をつぶさに検討した上で、労働の“無力性”(=powerlessness)と“無意味性”(=meaninglessness)という要因に注目し、無意味性と無力性の高い労働を以って“疎外された労働”と規定致しました。私はブラウナーの労働疎外理論は、今日においても大筋において支持できる秀逸な理論であったと考えています。ただ、“無力性”と“無意味性”に加えて、新たに“創造性の欠如”(=lack of creativeness)という要素を付け加えることによって、ブラウナーの労働疎外論は一層の深化を遂げることができるのではないかと密かに考えているのです。

ブラウナーは、仕事そのものに“意味感”または“目標感”が感じられる度合によって、〈疎外された仕事〉の程度すなわち仕事の疎外度が規定されることを強調しています。私はこの二つの要因に加えて、仕事そのものにどの程度創造の余地が残されているかが、疎外度を定める決定的に重要な要因なのではないかと考えているのです。分業によって、ある特定の仕事が部分的な作業になってしまうために、その仕事が一体全体何を作るために行われている作業なのか分からなくなってしまう、といったようなことは得てして起りがちなことです。その場合確かに、部分的な作業を行う仕事には“意味感”や“目標感”が感じられなくなり、仕事が“疎外され

た労働”であると感じられることが多いにちがひありません。しかしながら、“意味”と“目標”が明々白々であり、自分の好みのペースで仕事を遂行できるような“無力性”とは無縁な仕事であったとしても、疎外感を払拭することが難しい仕事はこの世に実はゴマンと存在するのです。

一例を挙げて、説明しておきましょう。

最近日本で消費されている栗の大部分は、中国からの輸入品であると言われていています。日本に輸入されている栗のうち、ケーキの素材として使われる中間製品の栗、すなわちビン詰めされた甘い栗は、中国の食品工場において皮むきされ、甘く煮られた後にビン詰めにされて日本に輸出されてきます。食品工場では中国人の女工さんたちが、手とナイフを使って、ものすごい速さで栗の皮を剥いていくのです。この栗の皮剥き作業は、ナイフという道具だけを使った手仕事ですので、仕事のペースが機械によって決められたり、あるいは仕事が機械によって振り回されることもありませんし、当然ながら人間が機械の奴隷みたいになってしまうこともないのです。女工さんたち自身が仕事のペース・メーカーですので、ここでは労働者が仕事の主人公であると断言してよいと思われれます。ケーキの食材として甘く煮た栗を製造しているわけですから、仕事の目標は非常に明白でハッキリしています。栗の皮剥き仕事には、無力性も無意味性もまったく見られませんので、ブラウナーの規定に従う限り、栗の皮剥き仕事は必ずしも〈疎外された労働〉とは言えないわけです。しかしこの仕事は、誰が見ても極めて非人間的な仕事だと言わざるをえないでしょう。栗の皮剥き作業は、女工さんたちが賃金を稼ぐために、イヤイヤやむを得ず行っているところの Toil・アンド・トラブル以外の何物でもありませんし、明らかにこの仕事は〈疎外された労働〉であると言えるでしょう。

疎外された労働を、労働の無意味性と無力性の要因のみによって規定す

るのは、やはり不十分なのではないでしょうか。仕事が、働き手にとって Fremd (fremd [よそよそしくなじめないの意味] — マルクス『経済学・哲学草稿』で使われている言葉) なものになってしまうのには、ブラウナーが指摘している二つの要因以外に、何か別の要因が作用しているからなのではないでしょうか。

仕事そのものが面白いと思えるか否かの決め手は、仕事そのものに創意工夫の余地が残されていること、すなわち仕事の中に、人間が創意と工夫によって対処するしかない“不確実性”(=uncertainty)の要素がタップリと残されていて、仕事を遂行するために絶えず創意と工夫を図る必要があるの否かに掛かっていると言えるのではないのでしょうか。仕事そのものに面白さが感じられるかどうかは、仕事がどの程度創意と工夫を必要としているかによって決まるのではないかと、筆者は長らく考えてきました。仕事を遂行する上で必要とされる創意と工夫の余地のことを、仕事の“創造性”と呼ぶことにしたいと思います。そして、創造性をまったく必要としない仕事をもって、“創造性の欠如”した労働と規定し、労働の疎外度を規定する第三の要因とすることにしたいと思います。

#### 〔B〕 町工場の仕事には楽しい仕事が多い

ところで、経済学的労働観の見直しをするに当たって、本論文が何故に小関智弘の町工場巡礼記に注目するのか、とりわけ、小関智弘の巡礼記の主たる対象である大田区の町工場群を取り上げる理由は何処にあるのか、その点について少しばかり説明をしておく必要があるかと思われます。小関智弘の町工場巡礼記に登場する町工場の大半は、第一に、従業員数で見ると10人未満の零細企業あるいは20～30人規模の中小企業であり、第二に、業種が多岐にわたっているために標準産業分類によって分類するのは困難なのであるが、一応、金属加工を中心にした機械の部品ならびに試作品の製造業と言える産業に集中している〔以下 中小機械工業と呼ぶ〕、といった二点を特徴として指摘することができるであろう。小関智宏は、



我が国最大の中小機械工業の集積地域である大田区の出身であり、高校卒業後一貫して旋盤工のキャリアを歩んできた人でありますから、氏の町工場巡礼記の大部分が、町工場で人生を送った機械工を中心にした物語になってしまうのはしごく当然であるといえましょう。筆者は氏のルポルタージュが、町工場で働く人々の生活の断面を描いた単なるドキュメンタリーに終わらず、機械工としての職業的生涯（＝キャリア）を生きた様々な人物の人生記録になっている点に強く惹きつけられるのを感じます。

小関智宏の町工場巡礼記を読んでいて、読者が最初に受ける強い印象は、巡礼記に登場する機械工や町工場の“社長”さんたち、それに言うまでもないことでありますが著者の小関さん自身が、おしなべて明るい性格の方々であり、自分がやってきた或いは現に行っている仕事に対して強烈な誇りと自信をもっていて、何かというと仕事の自慢話をするのが好きな連中であり、ひょっとすると仕事中毒症（ワーカホリック）に罹ってしまった人たちなのではないかと思われるほど仕事好きな人が多いということです。

筆者は魚釣りが趣味ですので、休日にブラリと釣りに行くことが多いのですが、いつもの釣場に行くと、偶然顔見知りの太公望にお目にかかることがしばしばあります。釣師は、顔見知りの太公望であってもお互いに相手が何者であるかまったく知りませんし、また知ろうともしませんが、それでも皆話好きで、釣り糸を垂れながら暇つぶしに語り合う話題はいつも同じで、釣りに関する腕自慢と相場が決まっているのです。要するに釣師たちは、自分がこれまでに挙げた釣果や大物を釣り上げた自分の技量に関する自慢話をするのが大好きで、魚などはどうでもよく釣そのものが面白くてたまらないといった人種なのです。

“先月ここで3尺の鮒を釣り揚げましたよ。あの時のハリスは、たったの1号だったのですわ”（エッヘン）

“へー、1号のハリスで尺鮒をねえ。そりゃーすげーや”

“糸が切れないように、竿はこんな風にまっすぐに立てて……”

このような自慢話を飽きずに何度も繰り返す太公望たちに、大田区のベテラン機械工や社長さんたちは、なんと良く似ていることでしょうか。

自慢話というものは、話している本人は気持ちよく話しているのですが、聞かされている方にとっては、退屈で興ざめな場合がはなはだ多いものです。しかし、小関智弘の町工場巡礼記に登場するベテラン機械工たちの自慢話は、興ざめどころか、どことなくユーモラスで面白く、清々しさや時には感動をさえ覚えてしまうことが多いのではないのでしょうか。それは筆者自身が、仕事人間や会社人間を深く尊敬していて、NHKの仕事人間を描いた番組“プロジェクトX”が大好きという、旧世代によく見られる仕事一筋人間特有の偏見によるのかもしれませんが。しかし、万事がカネ、カネカネのカネ万能の社会にあって、カネや名声や地位には至って淡泊でありこだわりを持たないにもかかわらず、仕事だけは人一倍大好きで仕事には強いこだわりを持って生きている職人肌の人間の生き様を見ると、若い世代の人々でさえも、感動を覚えることがあるのではないのでしょうか。

そのような仕事人間の生きた実例を、一つだけ紹介しておきましょう。

2002年10月に筆者は、ゼミ生3人を連れて、長野県埴科郡坂城町に機械工業の調査に行ったのですが、その時に偶然出くわしたちょっと変わった人物を紹介しておこうと思うのです。坂城町には、アート社という風変わりな名前を持った町工場があります。西澤友介社長に、社長の奥さんと娘を含む12名の従業員だけで成り立っている、典型的な零細企業の町工場といってよい工場でした。しかしこの会社は、例えばモリブデンやチタンのような切削加工の難しい“難材”の加工あるいは超精密加工の分野におい

ては、日本中に名を知られた会社なのであって、ただの町工場では決してありません。筆者とゼミ生3人は、坂城町の商工課長の案内でアート社を訪問したのですが、そこで思わぬ体験をさせてもらいました。

西澤社長は、筆者と同年齢で、昭和17年の生まれです。地元坂城町の中学校を卒業すると直ちに、神奈川県川崎市の町工場に就職し、旋盤工になるための修行をしながら川崎と蒲田に8年間暮らしていたそうです。高校は、川崎市の夜間高校を卒業したとのこと。西沢社長は美術が得意で、坂城町に帰ってきて一時期、建築の予想完成図などを書いて暮していたこともあったそうです。そのせいか、社長室（社長室といっても事務室のコーナーに、ソファと書棚を置いただけの小さな空間に過ぎませんが）の書棚には、漫画本が何冊か並んでいました。そして漫画本と並んで、矢口高雄の漫画『釣りキチ三平』に登場する三平とユリッペの人形が置かれていました。西澤社長は、矢口高雄とは釣友達で、坂城町を縦断する千曲川は鮎釣りで有名ですので、鮎の解禁日を迎える頃になると、決まって矢口さんを招いて鮎釣をするのだそうです。釣仲間の友情と言うのでしょうか、やがて矢口さんは、『釣りキチ三平』に登場するキャラクターの人形を作って売る権利を、西澤社長にタダであげてしまったのだそうです。西澤社長は、現在までのところ、三平とユリッペの二つの人形しか作っておりませんが、これから徐々に人形の数を増やしていく予定であると言っておられました。

三平とユリッペの人形は、コレクターには一組5000円で売られていました。筆者は、アート社訪問の記念に一組売ってもらいましたが、市販されておきませんので一般には入手は難しいようです。この人形は、プラスチック成形で作られている人形なのですが、成形に使われる金型は、社長自らが苦心に苦心を重ねて作成したのだそうです。工場のMC（マシニング・センタ）を使って、ミクロン単位の精密加工を粘り強く何回も施して、やっとこさ金型を仕上げたのだそうです。ここから先の話は、太公望たちの世界とまったく同じです。従業員も社長も、日常の仕事をしながら、

時々趣味の如くアートの仕事をするのだそうです。社長は、『釣りキチ三平』に登場するキャラクターの人形作りに没頭し、ある従業員は、難材とくに金（金は柔らか過ぎて加工が難しいので難材に入るのだそうです）を使って五重の塔のミニチュア作りに励み、などなど、社員のすべてが美術工芸品作りを楽しんでいるのです。機械工の一大アーティスト集団といってよいでしょう。しかも作っているものは、売ろうと思えば相当の価格で売れる高級工芸品ばかりなのです。

自慢話だけで、社長の話は延々2時間以上も続いたように記憶しています。坂城町の商工課長が、“社長、また改めてお話をお聞きしたいと思えますので、今日のところはこのくらいで”と、話の腰を折らなければ、何時までたっても話は終らなかったのではないのでしょうか。聞いていた筆者も学生も、面白い人物に会えたことでいささか興奮してしまいました。

西澤社長のようなタイプの機械工の存在は、坂城町や蒲田のような中小機械工業が集積した町では珍しいことではありません。熟練機械工のキャリアを歩んできた人のパーソナリティーの特徴は、以下の三点にまとめることができるのではないかと思います。

- (1) 概して性格がネアカで話し好きであること
- (2) 仕事に自信と誇りを持っているだけでなく仕事好きであること
- (3) “職人氣質”あるいは“芸術家気質”を持っていること

この(1)~(3)の特徴をもった人物として、筆者は自然にある人物を連想してしまわざるをえません。戦後日本の傑出した企業者の一人である、本田宗一郎を連想してしまう人が多いのではないかと思います。本田宗一郎は油絵を描くのが趣味でしたので、現役を退いてからよく絵を描いて過ごしていましたが、本田さんの絵はほんとうに素人とは思えないほどのみごと出来栄でした。本田さんは、“芸術家気質”を強くもった典型的な

熟練機械工であり、夢を追い続ける企業者であったといえるでしょう。あの底抜けのネアカ人間で天真爛漫な性格の本田さんを思い出すたびに、思わず笑いが込み上げてくるのを抑えることができません。子供のような無邪気さを終生失わなかった人でした。その自信の強さと誇りの高さについては、あえて説明をする必要はないかと思われます。CVCCエンジンの開発方針を巡って、ホンダの技術陣と本田さんが抜き差しならない対立状態になった時に発せられた本田語録、“だから大学出はダメなんだ”だけで十分かと思われます。

西澤社長あるいは本田宗一郎のような人のパーソナリティーは、中小機械工業の世界で育った機械工に特有のパーソナリティーとはいえないでしょうか。創意と工夫の余地をタツプリと残した金属の切削加工の世界に永年住んでいると、何時の間にか自然に、西澤社長や本田宗一郎のようなタイプのパーソナリティーが形成されてしまうのではないのでしょうか。人間の人格は、小関智弘が繰り返し強調しているように、仕事を通じて形成されていく面が非常に大きいのではないのでしょうか。“仕事が人間を作る”，あるいは，“人は仕事によって作られる”という格言は、小関さんの好きな格言なのですが、まことに物事の本質をついた一言のように筆者にも思われるのです。

### 〔C〕 熟練工のアイデンティティ

仕事に誇りと自信を持っていて、例えば“私は旋盤工です”といったように、人前で堂々と自分の職業を名乗れる人が内面に秘めている職業意識のことを、職業的同一性と呼ぶことにしたいと思います。ここで使用する同一性という概念は、E・H・エリクソンが『幼児期と社会』（1950年）において提起した〈identity〉という概念の訳語に他なりません。職業的なアイデンティティとは、自分が従事している仕事、あるいは自分が所属している職業集団を以って、人が〈私は〇〇である〉と自己規定をし自己表現するのを常としていること、すなわち職業の世界における〈自分〉を意

味しています。〈私は〇〇です〉と職業名を名乗った時に、人はその仕事に職業的アイデンティティを感じている、とすることができるのです。エリクソンのアイデンティティ理論によると、人間の精神的な〈不安〉あるいは〈不安定〉の多くは、アイデンティティの形成が首尾よく行われなかったり、アイデンティティが失われてしまった時に起こる心的現象なのだそうです。ですから、人が精神的に不安定な状態に陥ったりあるいはパニック状態に陥った場合、そのような心的状態をエリクソンは、アイデンティティの危機(=アイデンティティ・クライシス)と呼んでいるのです。

筆者は、精神分析学の分野に関してはズブの素人にすぎませんので、知ったかぶりの議論はこの辺でやめておくことに致しましょう。しかしエリクソンのアイデンティティ論には、労働研究の領域においても絶対に無視してはならない、重要な問題提起が含まれていると思われます。これまで労働経済学の分野において、働き手の熟練形成やキャリアの研究は、もっぱら人的資本論(あるいは人的投資論)の観点にたって行われてきましたが、人的資本論の射程距離ははなはだ短く、熟練形成とキャリアが人間の人格形成やアイデンティティの形成に深く関わっている点に注意をむけようとは致しません。人的資本の蓄積を、働き手の所得稼働能力(earning power)の向上に結びつけて理論を組み立てたのは、人的投資論の大きな功績といえますが、そこに留まっていないで視野をもう少し広げ、アイデンティティの形成論にまで射程距離を伸ばす必要があるのではないのでしょうか。

2002年12月のある日に、筆者は、卒業を間じかに控えたゼミ生の女子学生から、相談をもちかけられたことがありました。この女子学生は、就職も希望通りのところに決まっていたのに特に問題はなかったのですが、大学卒業後にすぐに結婚することになっているので、将来に不安を感じるということです。

学 生「結婚生活と仕事の両立に自信が持てなくて悩んでいるのです」

先生「結婚してすぐに仕事をやめてしまうのではなく、2～3年仕事を続け仕事を一通り覚えてから退職し、主婦專業になったらよいのではないのでしょうか」

学生「私、ある会社で面接を受けていた時、会社の人から“人生は仕事だよ”って言われて、ショックを受けたことがあるのです」

先生「……」

学生「先生も、“人生は仕事だ”と思いますか」

先生「先生が今研究している、小関智弘という人が最近書いた本のタイトルは、『働くことは生きること』となっているんだよ。確かに小関さんの言う通り、人生は仕事だと思う。でも、家庭（ホーム）をつくることは、仕事と同じか仕事以上に大切なことだからね」

学生「卒業してすぐに結婚して仕事をやめちゃうと、仕事を覚える機会がなくなってしまうし、私は何のために大学を出たのかと思ってしまうのです」

先生「学生生活をエンジョイできたのだから、それだけでも大学にきた意味はあったのではないですか」

学生「主婦として人生を送ることに對して、不満があるのではありません。せっかく大学を出たのに、専門といえるような仕事を覚えることもなく生きていくのが不安なのです。夫になる人の給料だけで、生活していけるのかどうかということも不安ですが」

先生「先生は、君に適切なアドバイスをすることはできませんが、婚約者とよく話し合って、“二人にとって最適と思われる道”を模索していく以外に道はないのではないのでしょうか」

この女子学生は、家庭（＝主婦）と職業（＝OL）の狭間にあって、進路の選択に悩んでいるのですが、“仕事が人生だ”という一言の重みははなはだ大きかったようです。

中小機械工業の町工場群が集中する大田区の大森・蒲田において、小関さんのような熟練機械工が大量に養成され、日本の機械工業を支えてきました。この粹な機械工たちの物語を紡ぎ出すことを通じて、仕事とキャリアと熟練とアイデンティティについて少し考えてみたいと思うのです。

平田喜彦教授の退職を惜しみつつ

(2003年1月31日午前3時脱稿)



Labor Writer Tomohiro Koseki and the  
Machi-kohba's World (Part 3)

Susumu HAGIWARA

《Abstract》

Tomohiro Koseki is a well-known labor writer who has been working as a skilled machinist for over forty years in Tokyo. He has published many books in which the life and work of factory workers in small factories at Kamata and Ohmori are described very vividly and in depth. These publications can be regarded as an excellent collection of labor history documents in the post-war Japan.

The article attempts to describe the career patterns of skilled factory workers in Tokyo by utilizing the Koseki's writings. A small factory in town is called "machi-kohba" in Japanese. The article focuses upon two specific points that are career-patterns of machi-kohba workers and their skill formation processes. This article covers the introduction to the second chapter.